

開腹術後における腹帯着用の効果の検討

キーワード：腹帯，開腹術後，創痛

1 病棟 5 階西

藤村紘子（手術室） 杉野裕美 下野加奈 藤里美子（1-7 西） 宇多川文子

I. はじめに

現在，山口大学病院の開腹術後患者には慣習的に腹帯を着用している．これまで腹帯着用の目的として，創痛の軽減や創の保護，固定による創の安静が言われてきた．しかし，実際に，腹帯がずれやすいことなどから，目的が十分に果たされていないのが現状であり，腹帯の着用が必要であるのか疑問に感じた．

文献より，腹帯を使用しなくとも，創の保護と安静は保たれているといわれているが，創痛に対する腹帯の効果は明らかにされていなかった．そこで今回，腹帯の効果を創痛に着目し調査した．

II. 目的

開腹術後の創痛に対して，腹帯着用の効果があるかどうか調査し，効果がないのであれば，必要性を検討し，腹帯着用を中止する方向に進める．

III. 方法

対象：山口大学病院第一外科で開腹術（胃・大腸切除術の正中切開）を施行した患者のうち，硬膜外注入のある患者で，本研究に同意の得られた患者 34 名．尚，術前・術後とも歩行不可能な患者は対象外とした．

研究期間：平成 17 年 8 月から平成 18 年 7 月

方法：対象患者を術後腹帯を使用する群（以下 A 群とする），使用しない群（以下 B 群とする）に無作為に区別した．尚，研究の主旨を説明した段階で腹帯使用を希望された患者は A 群とした．

① 両群とも，術前と術後 2 日目に病棟内（120m）を 1 周してもらい，その速度を測定し，術前後の歩行速度の差を出し，両群に有意差があるかを比較した．尚，術前歩行時は術後の状況に近づけるため，500m 1 の点滴 1 本をつるした点滴台を持ち歩行してもらった．

② 術後歩行時に創痛の程度を visual analogue scale, VAS（以下 VAS とする）を使用し示してもらい，両群の創痛の程度を比較した．また，鎮痛剤の使用についても比較検討した．統計的処理は①②共に t 検定を用いた．

IV. 結果・考察

対象患者 34 名のうち，A 群 17 名・B 群 17 名で男性 25 名，女性 9 名であった．疾患は胃癌 15 名，大腸癌 19 名．年代は 40 代から 70 代で，平均年齢は 63 歳だった．（表 1 参照）

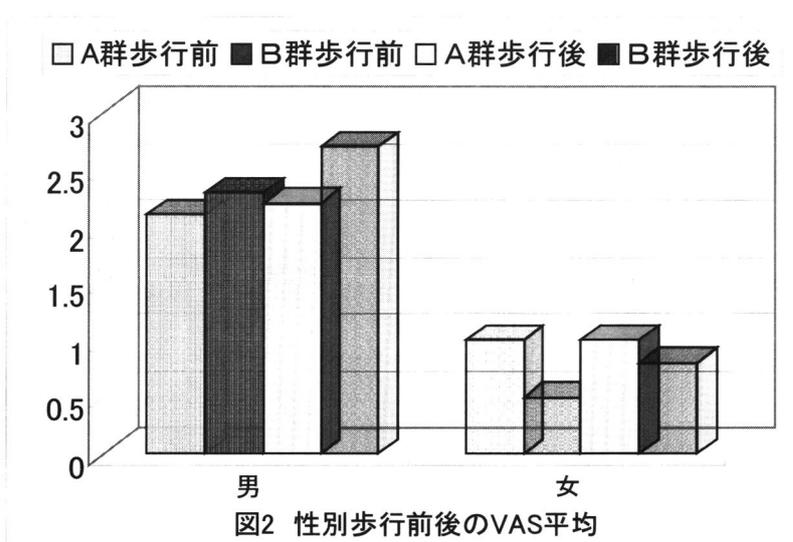
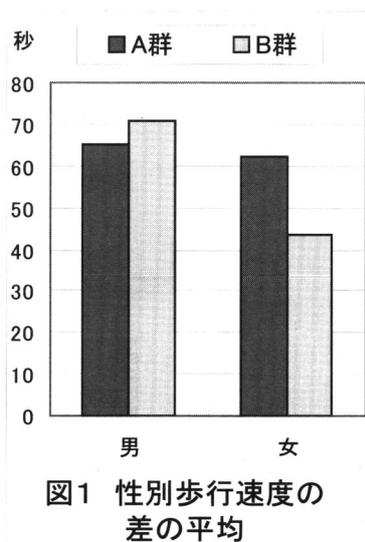
表1 患者属性

	腹帯あり (A群)	腹帯なし (B群)
性別	男性 12名 女性 5名	男性 13名 女性 4名
年代	50代 4名 60代 8名 70代 5名	40代 1名 50代 7名 60代 4名 70代 5名
疾患	胃癌 7名 大腸癌 10名	胃癌 8名 大腸癌 9名

①性別

男性の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群65.2秒、B群71.1秒だった。VASの平均は歩行前A群2.1、B群1.0、歩行後A群2.2、B群1.0だった。

女性の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群62.4秒、B群43.8秒だった。VASの平均は歩行前A群1.0、B群0.5、歩行後A群1.0、B群0.8だった。(図1・2参照)



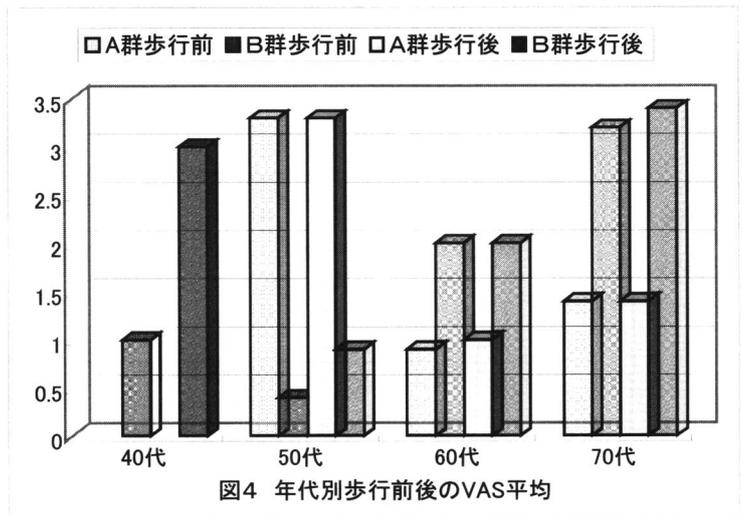
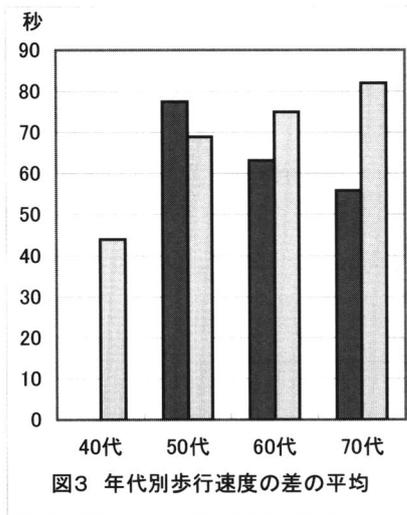
②年代別

40代の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はB群44秒だった。VASの平均は歩行前B群1.0、歩行後B群3.0だった。

50代の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群77.5秒、B群69.0秒だった。VASの平均は歩行前A群3.3、B群0.4、歩行後A群3.3、B群0.8だった。

60代の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群63.2秒、B群75.0秒だった。VASの平均は歩行前A群0.9、B群2.0、歩行後A群1.0、B群2.0だった。

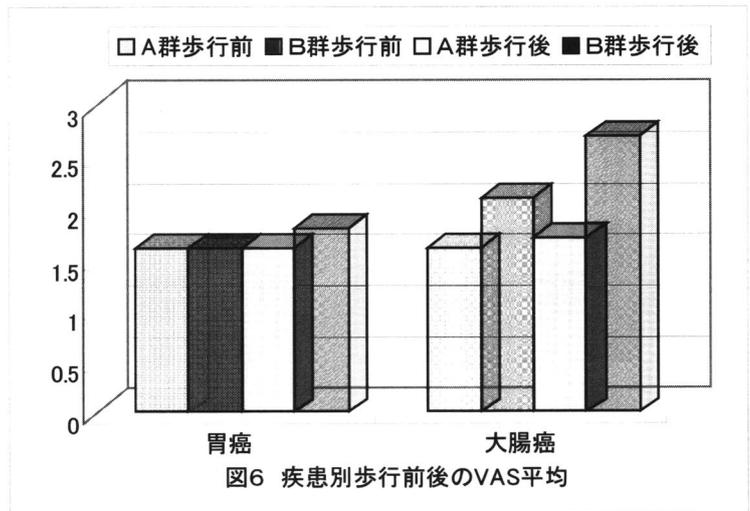
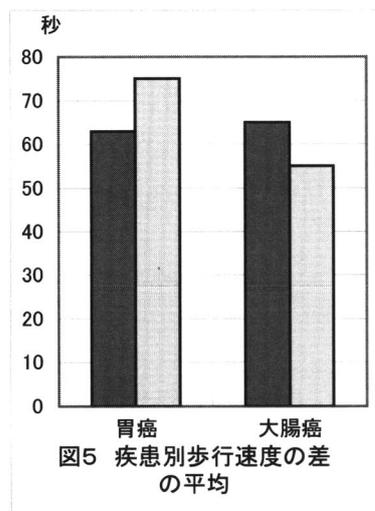
70代の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群55.8秒、B群82.0秒だった。VASの平均は歩行前A群1.4、B群3.2、歩行後A群1.4、B群3.4だった。(図3・4参照)



③疾患別

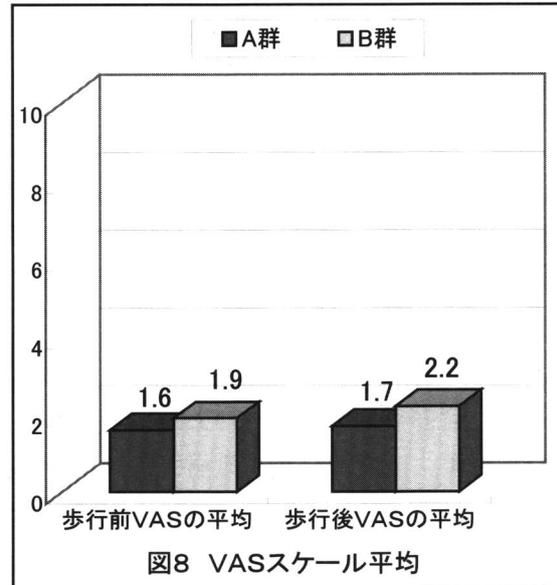
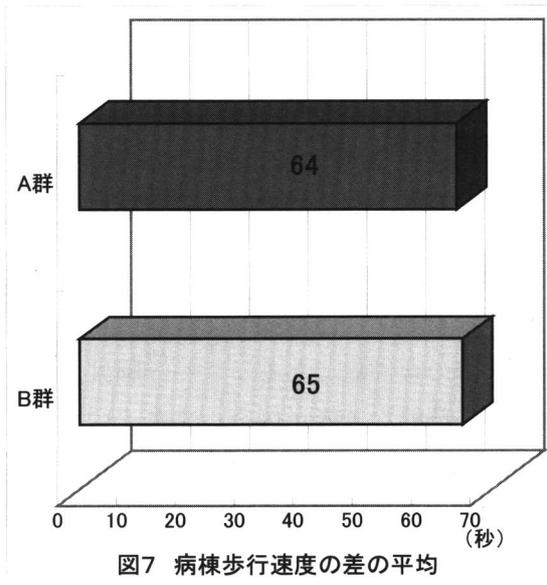
胃癌の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群63.0秒、B群75.0秒だった。VASの平均は歩行前A群1.6、B群1.6、歩行後A群1.6、B群1.8だった。

大腸癌の病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群65.0秒、B群55.0秒だった。VASの平均は歩行前A群1.6、B群2.1、歩行後A群1.7、B群2.7だった。(図5・6参照)



④全体

病棟内1周歩行速度の術前術後の差の平均はA群64秒、B群65秒だった。(図7参照) VASの平均は歩行前A群1.6、B群1.9、歩行後A群1.7、B群2.2だった。(図8参照) 鎮痛剤使用人数はA群3名、B群4名だった。



以上の結果より両群間に歩行速度とVASは有意差がないことがわかった。また性別、疾患別、年代にも有意差は認められなかった。創痛に対しては硬膜外注入が効果的であり、腹帯使用にかかわらずVASは低値を示している事がわかった。鎮痛剤使用に関しても両群とも使用頻度は少なく、軽度の創痛で離床ができていた。創痛に関して、腹帯使用の効果は無かったと言える。

また、今回腹帯を使用しなかった患者から使用しない事による不安の訴えはなく、受け入れは良好であった。平均在院日数をみてもA群25.1日、B群22.1日で術後経過に影響はなかった。患者にとっては、腹帯購入のコスト面の負担も軽減することから、腹帯着用を中止してもよいと思われる。

V. 結論

1. 開腹術後における腹帯着用の効果を創痛に着目して検討した。
2. 腹帯使用群と未使用群の術前と術後2日目の歩行速度の差に有意差はなかった。
3. 両群に歩行前、歩行後のVASスケールにも有意差はなかった。
4. 創痛に対しては腹帯の有無による影響はなかった。
5. 今後、開腹術(胃・大腸切除術)の術後には、腹帯の使用は必ずしも必要ではないと考える。

VI. 参考文献

- 1) 徳永なみじ：包帯法のエビデンス，臨床看護，28（13），2051，2060，2002。
- 2) 大和田恵理子，柳沼望美：腹帯を外せない患者の思い - 開腹術後患者のインタビュー調査から - ，看護総合，35，30 - 32，2004。
- 3) 古越小百合，羽毛田洋子，柳沢かおる他：開腹術後における腹帯使用の必要性の検討，長野県看護研究学会，24，136 - 138，2003。
- 4) 宮原真裕美，高田一枝，国料笑美子：術後疼痛の先御コントロール - 早期離床時の疼痛に着目して - ，成人看護I，33，3 - 5，2002。